

少女雑誌の部屋から

最後に手紙を書いたのはいつだったか覚えていますか？
パソコンや携帯電話が普及する前は、手紙を出す機会も少しはあったように思いますが、メールやLINEなどで事足りるようになってからはペンをとることがほとんどなくなりました。^{いにしえ}古の少女たちにとって、手紙は気持ちを伝えたり、連絡を取り合うための重要な手段でした。相手のことを考えながら、お気に入りの便箋や封筒を使って、できるだけ丁寧な文字で手紙をしたためる。そんなゆったりとした時間が心の安定につながっていたのかもしれないですね



雑誌紹介 18

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

少女の國 (成海堂/少女の國社) 大正15(1926)年1月号～
終刊時期不明

^{たかはだけかしょう}高畠華宵、竹久夢二、岩田専太郎、加藤まさを、といった当時一流の挿絵画家たちを抱え、ヴィジュアル面で質の高い雑誌を発行した。

当初は「五六年小學女生の友」の副題がついており、少女小説、童謡、少女詩等の文芸欄を中心に、東京女高師小訓導による学習欄、読者投稿欄を配し、従来の少女雑誌を踏襲した構成だった。第三号以降は文芸と画に特化した誌面へとリニューアルして、対象を小学校高学年以上に広げ、抒情に満ちた世界を発信した。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 18

小磯良平 (こいそりょうへい) 1903—1988

神戸市生まれ。東京美術学校(現東京藝術大学)西洋画科在学中の大正15(1926)年、帝展(帝国美術院美術展覧会)で「T嬢の像」が特選となる。画学生が描いたとは思えない完成度の高さを誇るこの作品で、画壇に鮮烈なデビューを果たした。首席で卒業後、昭和3(1928)年にフランスに留学し、2年間ヨーロッパを游学。神戸に戻ってからは精力的に絵筆を振るい始め、親しみやすい女性像を中心としながら、西洋絵画の伝統の中に、市民的でモダンな感覚と気品あふれる画風を完成させた。また、母校の東京藝術大学で教鞭をとり、画学生たちの若い感性を大切にした指導で、日本の洋画界に大きく貢献した。

少女雑誌には、昭和12～18年『新女苑』、昭和22～23年『少女クラブ』の表紙絵を描いている。

小磯良平の作品を観るには・・・神戸市立小磯記念美術館(兵庫県)
兵庫県立美術館 小磯良平記念室(兵庫県)

少女雑誌の豆知識

大正～昭和初期にかけて広告画や雑誌の挿絵で一世を風靡した^{たかはだけかしょう}高畠華宵。女学生たちの間では「華宵便箋」が大流行しました。大正14(1925)年から昭和14(1939)年ごろまで便箋会社4社が主に売り出したのだそうです。表紙絵と便箋用紙、封筒がセットになっており、最新モードの少女や、憂いをたたえる美少年など、様々な図柄がありました。全部で数百種が発売され、少女雑誌の中にも広告が掲載されるほどの人気ぶりでした。